

協働から新たな価値を創造する

「NPO法人フェアプラス」

障害者の自立支援に多角的な連携と協働からアプローチする団体があります。京都市下京区のNPO法人フェア・プラスです。事務局長の河西実さんにお話を伺いました。

フェア・プラスは、平成24年6月に設立したばかりの法人。障害のある人たちと発達途上国の貧困に苦しむ人たち、双方の課題に対し、企業・大学・市民・団体などを横につないだ取り組みが注目を集めています。

フィリピン原産の繊維「アバカ」を使った製品開発もその一つ。京都造形芸術大学生がデザインを担当し、今年5月に素敵なクッションとバッグが出来上がりました。学生たちのデザインをもとに、フィリピンの住民が加工、左京区の障害者支援施設「テンドーハウス」がクッションの綿詰めなど仕上げを担いました。販売面では新関西国際空港会社が協力し、同空港やオ

ンラインショップで販売しています。

もう一つ、障害者福祉施設が関わる取り組みがあります。高品質の焼き菓子の売り上げを利用者の賃金向上とパーキンソン病患者支援などの活動に役立てる「おいしいプロジェクト」です。亀岡市の「第三かめおか作業所」がパティシエと一緒に、パウンドケーキや安納芋タルトなどを製造。素材の生産者やフェアトレード※コーヒー等もつなげ、チラシやネットで販売していま



アバカ製品のバッグとクッション



▲事務局長の河西(かさい)さん

す。

河西さんは、もともとは商社マンで、発達途上国の開発援助に関わった際、「本当の生活支援とは何か?」という思いを抱きました。退社後、ボランティアやNGO活動に携わる中、3年前に心筋梗塞で倒れて障害者手帳の交付を受けたことで障害者の課題にも関心を持ったといいます。知り合いを通じ施設に足を運び、障害者の就労の状況を痛感。現場では、職員と利用者が精一杯仕事をしても、製品が売れず賃金が上がらない実態がありました。販路開拓、コスト、商品価値の向上...それらは、フェアトレードなど発達途上国支援でも共通する課題だと、河西さんは気付きました。「同じ状況にある一つの支援を横につないでいくことはできないか。」その思いからフェア・プラスの活動は生まれました。

「働きがいのある仕事につき、その収入によって生活を送る、それは障害のある人と発達途上国の人たち、どちらの自立にも大変重要。」と河西

さん。そして、「お客さんが欲しいと思う商品づくりこそが、喜びとなり働きがいにつながる。」という理念を、アバカ製品開発でも「おいしいプロジェクト」でも貫きます。単に人や団体をつなぐだけでは

ありません。アバカ製品開発では、学生がフィリピンや障害者支援施設を訪ね、住民や障害のある利用者からニーズを聞きました。「おいしいプロジェクト」のパティシエは、第三かめおか作業所に継続的に足を運び、通常商品の品質向上にもアドバイスをしています。「現場から教えられてばかり。人や団体が対等な関係を結び、強みと強みの足し算を生み出したい。」フェア・プラスの「架け橋」としての挑戦は続きます。

地域や社会福祉協議会に期待される1人

プエルタとフェア・プラスに共通していることは、これまでの縦割りの制度や支援の枠組みを超えた「挑戦」ともいえる活動です。どちらも設立後1年余りですが、その実践

は揺るぎない理念に支えられ、着実に地域社会へ変化や気づきを広げています。

取材の最後、「地域や社会福祉協議会に何を期待しますか?」という問いに、フェア・プラスの河西さんは、「社協や地域が持つ豊富なネットワークや情報を、もっと地域内の団体と共有し(課題解決に向けて)お互いの取り組みを活用できたら。」と語ってくださいました。本会のアクションプランでは、地域包括ケア「自立した生活を支える絆ネットワークの推進」を重点テーマの一つに掲げています。社会福祉協議会としても、障害理解の促進などの地域づくりとともに、地域福祉権利擁護事業や見守り、サロン活動など自身の取組を多方面に発信しつつ、地域内で活動する団体と枠組みにとらわれない協働を築くことが重要です。

※フェアトレード

フェアトレードとは、開発途上国の生産者と安定した価格で継続的取引をすることで、生産者の生活支援、生産地の環境保全、生産物の品質向上などを目指す活動のことをいいます。